

顔反応の距離の視点からの検討

Face Response and Distances in Rorschach method

横 川 滋 章*

Shigeaki Yokogawa

抄録

本稿では, Rapaport が提唱した「距離」の概念, 片口の「認知的距離」「体験的距離」の2つの距離概念について振り返り, Rorschach 法における「顔反応」について距離概念からの検討を行った。顔反応の出現を被験者の見たてにおける重要な key の一つとする筆者の臨床的経験と相違し, 健常者における「顔反応」の出現頻度は低いものではなく, 「認知的距離」においては公共性のある距離のうちと見なし得る。しかしながら「顔反応」における被験者の「体験的距離」で解釈上大きな相違がでること, かつそのことが見たての上で有用であることを示唆した。

Abstract

In this paper, Rapaport's concept of 'distance' and Kataguchi's were reviewed, and 'face responses' were discussed from the viewpoint of concepts of 'distance'. From the viewpoint of perceptual distance, in spite of my clinical experience, 'face responses' are not rare in normal data of Rorschach method, which means not significant. But from the distance in experience, I suggested how those responses are experienced could be useful and important material for the assessment.

§ 1. はじめに

Inkblot が「何にみえるか」を問うのが Rorschach 法である。扱われるのは Inkblot つまり「インクのしみ」であり, 基本的に何に見えても構わない。正解はないのである。正解はないのであるが検査者はその反応が, どこに (領域 Location) 見えたのか, 何が (内容 Content) 見えたのか, どうして (決定因 Determinant) 見えたのか, を問題とする。表題の「顔反応」であるが, Inkblot の全体あるいはほぼ全体を用いた, 現実ないし非現実の, 人間あるいは動物の顔 (もしくは顔を中心とした一部) といった反応を筆者は指して「顔反応」と本稿では呼んでいる。何をみても正解はない以上, 顔反応を出しても構わないのであり, 後述のようにそれ自体は決して珍しいものでもない。しかし, 特定の場面・特定

* 関西国際大学人間科学部

の文脈でこれが現れてくるとき、重要な意味をもつと筆者は考えている。「何をどこに何故に見たのか」のほかに検査者は、その「反応の質」も見るのであるが、これについては Form Level を反応の記号化の際につける。Form Level のほかに反応の質を吟味するものとして本稿では Rapaport にはじまる「距離 (Distance)」の概念を取り上げ、この「距離」の観点から「顔反応」について検討をする。

§ 2. Distance 概念の変遷

2.1 Rapaport の距離概念

Rorschach 法は、Herman Rorschach が 1921 年に「精神診断学 Psychodiagnostik」を著したのが、そのはじまりである。最も有名な投影法検査の一つとして、TAT (Thematic Apperception Test 主題統覚検査) とともに今日では知られている。しかし、1939 年、Frank がその言葉を用いるまで、投影法という言葉は心理学の分野では用いられてはならず、Rorschach 自身は自らの技法を「知覚の検査」として、「形態解釈テスト Form Interpretation Test」と呼んでいたのはよく知られている。Rorschach が早逝した後、Rorschach 法は北米に伝わり、5つの流れとなった。すなわち Beck 法、Hertz 法、Klopfer 法、Piotrowski 法、そして David Rapaport の流れである。Rapaport は Roy Schafer と、精神分析理論と Rorschach 法を結びつけたことで知られており、本来の意味で投影法として Rorschach 法を探求したとも言われている。

Rapaport(1946)はこの「距離 Distance」について以下のように述べている。「もし被験者の反応が、Inkblot をほとんど顧慮していないことを示していたり (不合理形態反応)、あるいは反応それ自体は良好であるのに過剰な連想的推論が伴われていれば、図版からの距離の増大 (increase of distance) を示唆している。その一方で、批判的統制の余地もないほどのリアルな感情的偏りや論理的偏りとともに、概念的および (または) 感情的に、被験者が Inkblot を変わることでできない現実と受け取っていることが反応に明らかであれば、それは図版からの距離の喪失 (loss of distance) を示唆している」

前述のように、被験者は Rorschach 法において、曖昧で多義的な刺激であるインクのしみ (Inkblot) を提示され、それが何にみえるのかを問われる。これらの Inkblot について本来、「正解」というべきか、「全く同一の対象物」というものは存在しない。そのため Inkblot を被験者は類似したイメージを引き出し、Inkblot を意味づけ、反応を生成しなくてはならない。このことについて片口 (1987) は以下のように述べている。

「たとえば、「カード I の全体に対する「チョウ」は高率で出現するので、公共反応 P とされているが、この場合にも、このプロットが、現実のどのような種類の「蝶」とも完全に合致するわけではない」Rorschach 法では正解はないが、それが「よい反応」か「不良反応」か、「質」は問われる。この「よい反応」の判定においては、その反応が公共性をもっているかどうか重要となり、公共性のある反応とは、つまり適度な「距離」のとれた反応と考えることができよう。Rapaport は不適切な距離についてはこれを、増大であれ喪失であれ、自閉的思考の所産であるとしている。

この Rapaport の距離概念について、その有用性を認められながらも、曖昧さがこれまで指摘されてきた。前半部分、「Inkblot をほとんど顧慮していないことを示していたり（不合理形態反応）、あるいは反応それ自体は良好であるのに過剰な連想的推敲が伴われていれば」は、Inkblot と反応との間の距離と読める。しかし後半部分、「批判的統制の余地もないほどのリアルな感情的偏りや論理的偏りとともに、概念的および（または）感情的に、被験者が Inkblot を変わることでできない現実と受け取っている」は、被験者と Inkblot との間の距離と解釈できる。Rapaport の距離概念は、1 元的なもので、その距離が「増大」ないし「喪失」と考えられるのであるが、何と何の間の距離なのか曖昧であるということが指摘されてきた。

2.2 片口の距離概念

片口安史は、Beck, Hertz, Klopfer, Rapaport, Piotrowski らのシステムの統合を、Klopfer 法をベースに行い、1956 年に「心理診断法 ―ロールシャッハ・テスト―」、1974 年に「新・心理診断法」、1987 年に「改訂・新・心理診断法」を著している。その体系は片口法として知られ、日本で広く用いられている。片口（1960）は、Rapaport の距離概念を、あらたな距離概念を提唱することで、2 元的に再解釈している。すなわち、「認知的距離」の次元に「体験的距離」の次元を付け加えたのである。

「認知的距離」は言うなれば、「Inkblot と反応の間の距離」である。反応が Inkblot の属性からどれほどかけ離れたものであるか、あるいは一致しているか。片口によれば、Inkblot のかたちなどの属性を著しく無視した反応は、「認知的距離」の増大となる。たとえば人間運動反応 M のように、実際には動いていない Inkblot に対して動きのある反応をみることも、主観的な意味づけであり、Inkblot と反応の間の距離の増大ということになる。形態を伴わない M や不良形態の M は、良形態の M よりもさらに「認知的距離」が増大してしまっていることになる。また色彩は Inkblot の属性として存在するものであり、色彩を無視するときには「認知的距離」は増大傾向にあり、FC のように形態に加えて色彩を扱う場合には距離が失われる傾向にあり、「インクのみ」、「赤い色・青い色」といった反応は、Inkblot・反応間の距離の喪失とされる。

片口の提唱した「体験的距離」はそれに対して、先に引用した Rapaport の「批判的統制の余地もないほどのリアルな感情的偏りや論理的偏りとともに、概念的および（または）感情的に、被験者が Inkblot を変わることでできない現実と受け取っている」という記述を言い換えたものである。これについて片口は以下のように述べている。

「この設問に対して自らの経験によれば、一見、同じような内容の作話反応であっても、分裂病と正常者との間に、そうした反応を与える態度に、ニュアンスの相違が存在するように感じている。すなわち、分裂病者は、より強い現実感と逼迫感をもって反応する傾向が認められるのに対し、正常な被験者は、ある種のゆとりと遊びを感じさせる態度をもって、この種の反応を与えるように思われる」すなわち、統合失調症の患者が「より強い現実感と逼迫感をもって」反応をするとき、「体験的距離」は失われる傾向にある。そして、正常者が統合失調者とほぼ同等の「認知的距離」である不良反応を示したとしても、そこに「ある種のゆとりと遊びを感じさせる態度」がみられるとき、「体験的距離」は

相対的に増大していることになる。

片口はさらにこの2つの距離の関係を<図1>のように整理している。中央のほどほどの距離、2つの距離をほどよく取れる場合、公共性の高い反応となり、適応的な行動が期待できる。平凡反応Pなどはこの領域に入ると考えられる。そして、そこから逸脱することについて以下のように述べている。

「これら二つの距離の概念を組み合わせることによって、われわれは次のような理解に達することができる。すなわち、認知的（プロットー反応間）距離の極端な増大と喪失は、ともに逸脱的であり分裂病的とも言えるが、この際、体験的距離の喪失はその病的可能性をいっそう強め、増大はその可能性を弱める。」

Rapaport(1946)は、距離概念を基礎とし、特に統合失調症患者にしばしばみられる病的な言語表現を「逸脱言語反応 Deviant verbalization」と呼び、25のカテゴリーに分けて論じている。これらの反応は「認知的距離」の問題として整理することができ、解釈の上で非常に重要である。たとえば逸脱言語反応の一つ、「作話的傾向反応 fabulized response」について片口は以下のように述べている。

「正常者も、この種の反応を与えるが、その際、自分が想像をたくましくしているとか、少しふざけているということを自覚しているのに対し、精神病患者は、なまなましい現実的な印象をもって反応しがちである。筆者の表現を用いれば、体験的距離の縮小、ないし喪失ということになる。」

片口は「認知的距離」の重要性に加えて、「体験的距離」の在り方、どのように体験をしているのか、認知的距離の面で逸脱した反応をどのように語るのか、その語り方を考慮することの重要性を示唆している。

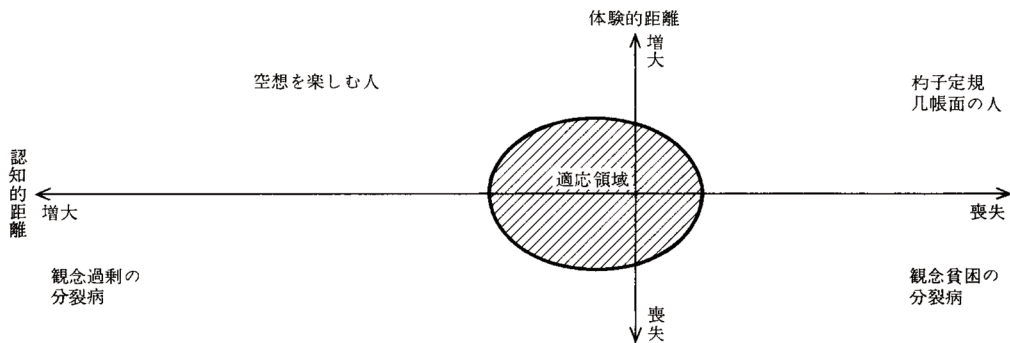


図1 認知的および体験的距離の関係（片口, 1987）

2.3 諸家の距離概念

片口の2元的な距離概念は片口法の普及に伴い日本において広く知られるようになったが、諸家による片口の距離概念への批判や、Rapaportの距離概念の再構築の試みがなされてきた。田澤(1995)が、片口・空井・馬場らの見解について詳細な比較・検討を行っており、ここでは簡単にふれるにとどめる。空井(1969)は、Rapaportの距離概念についての自らの理解を「(1) 通例のロールシャッハ反応においては、カードからの適切な距離が存在し、そこに常識的論理の裏付けがある。(2) 適切な距離を失うと、

距離の喪失や増大が生じ、そこには常識的でない奇妙な論理が存在する」と要約し、「病的思考とそれにもとづく論理的欠陥」の重要性を強調している。

「極限すれば、“距離”は、意味的にはインクプロットという現実と被験者の間を、操作的にはインクプロットと反応との間を表わしているといえる。しかも、この両者には矛盾はない。なぜなら、反応はその人（あるいはその人の思考過程）を代表すると考えることができるからである。」

「このような観点からみると、Rapaport の叙述には何らの混乱もみられない。むしろ距離とは、インクプロットか \leftrightarrow 反応か、インクプロット \leftrightarrow 被験者か、どちらかにきめてしまわなければならないという態度の方が、不可解に思われる」

空井は片口の「体験的距離」の概念を「Rapaport のような距離の概念にもとづく異常言語表現の分析に用いることは不相当」とし、距離概念は1元的に考えるという立場を取っている。

馬場・吉田ら(1980)は、Rapaport 同様に精神分析の立場から Rorschach 法の実践・研究を行い、「被験者のプロットからの距離」と「内面からの距離」とを区別している。「内面からの距離が喪失しても、極度に増大しても、外界との距離は現実と全く対応しないほどに極端に増大する」と報告し、さらに「距離についての観点は内面との距離のみに絞ってもよいであろうと、われわれは考える」としている。「被験者のプロットからの距離」は片口の「認知的距離」と、「内面からの距離」は「体験的距離」と類似するとしており、2元的理解と整理してよいであろう。

片口自身は既述のように、1974年に「新・心理診断法」、1987年に「改訂・新・心理診断法」を著しているが、距離概念について、これらの研究を踏まえての抜本的改訂や修正は行っていないようである。筆者としては、片口法の距離概念を中心に以下の議論を進めていく。なお、田澤(1995)はこれらの距離概念を詳細に比較・検討し、知覚的能動性と受動性の観点から踏まえて、「被いのなさ」「庇覆」「交通の断念」の3つの体験様式との関連で距離概念について論じている。酒木(1999)は「刺激としてのプロットとの距離」(反応とInkblotの属性との距離)と「そのプロットにもたらされた意味との距離」(言語化された反応と内界との距離)とに区分けし、距離概念の再構築を試みている。用語こそ違え、酒木自身もふれているように、片口の2元的距離概念に近い印象がある。

§ 3. 顔反応と距離

筆者の少ない臨床場面での経験では、Inkblot 全体ないし大部分を用いた Form Level の悪い(W-)の「顔反応が」、ポイントポイントで出現することが、被験者の見たてに際して、病態水準をはかる上で役に立ってきた。(今から思えば汗顔の至りであるが)このエヴィデンスに基づかない主観的な経験に基づいて、事例検討会などで得意気に、この「顔反応」の出現を根拠に持論を展開したものである。その結果、「私も第○カードで顔をみたけれど、私の病態水準も…」と、同僚や後進を不安にしたりもした。「実際、顔にみえるじゃないですか」という、(場合によっては)もっともな指摘を受けることもあった。とはいえ役に立ったという主観的経験は筆者の中で根強く、本稿の執筆のそもそものきっかけとなっている。

3.1 認知的距離からの検討

「認知的距離」は既述のように「Inkblot と反応の間の距離」であり、ここでは Inkblot の形態的属性が、現実もしくは非現実の人間ないし動物の顔と似ているか、かけ離れているかが問題となる。これもまた既述のように、Inkblot は特定のものを表わすものではなく多義的であり、もちろん顔を表わすよう作られた Inkblot は存在しないはずである。従って、ほどよい認知的距離・適応的で妥当な認知的距離かを見ることになる。そして Rorschach の Inkblot はそれぞれ異なる形をしており、図版毎に検討する必要もある。

ほどよい適切な「認知的距離」にある、公共性の高い反応の代表が、各図版に設けられた平凡反応 P である。一般の被験者によって特定の Inkblot の領域に対して頻繁に与えられる反応である。W の顔反応は、片口 (1987) をはじめとする日本人を対象にした代表的な平凡反応のリストを見渡しても、米国の Exner (2002) のリストにおいても、ほとんど見当たらない (高橋・北村 (1981) のリストにおいて、I カードの「動物の顔」をかりうじてみつけることができた)。

John E. Exner は、Beck, Hertz, Klopfer, Piotrowski, Rapaport の 5 つの Rorschach 法の体系のうちでもっとも実証的なものはどれか、もっとも臨床に役に立つのはどれかという観点から、「共通言語」を作ることを目指し、包括的システム (Comprehensive System) を作り上げた (1974)。2002 年の Fourth Edition まで改訂が重ねられたのであるが、Form Level の評定に頻度の分布による方法を用いている。「+ 優秀・きわめて詳細 Superior-overelaborated」, 「o 普通 Ordinary」, 「u 特殊 Unusual」, 「- マイナス Minus」の 4 段階評価である。反応にはその出現頻度に応じてそれぞれ o や u あるいは - と記載され、リストにないものは基本的に - と評定される。Exner (1995) の Rorschach Form Quality Pocket Guide Second Edition を以下見ていくと、I カードにおいて「(不特定の) 動物の顔」「猫の顔」「狐の顔」「虎の顔」「狼の顔」などは o とされている。対して「人間の顔」などは - とされている。II・III・IV・VI・VII・カードにおいては動物も人間も -、VIII・IX カードでは「道化」「怪物」は u、ほかの「顔」は -、X カードは Dds22 で - となっており、V カードについては「顔」の記載は存在しない (- 扱い)。

高橋ら (2002) は、日本人のデータに基づく Exner 法の形態水準表を作成している。健常成人 400 人のデータを検討し、2% 以上 (8 人) 以上の被験者が答えたものを o、2% に達していないが反応内容の形態と Inkblot の形態が合致していると考えられる反応を「基本的」に u とした (基本的にというのは、(o), → o, u などの記号化も成されているからである)。それによれば I カードでは「人の顔」が u 扱い、(Hd) の「悪魔」「鬼」「怪物」「ハロウィンのカボチャ」などの顔が o 扱い。Ad の「犬」「牛」「狼」「狐」などの「動物の顔」が o 扱い。(Ad) の「怪獣の顔」も o 扱い。II カードは Hd の「人間の顔」が o 扱い。(Hd) 「鬼」, Ad・(Ad) 「動物」「漫画化された動物」の顔も o 扱いである。III カードも見方によっては「人間の顔」が o、見方によっては -、「動物の顔」は基本的に u。IV カードは「人の顔」が -、「動物の顔」「怪獣の顔」が o。VI カードは「人間の顔」が -、逆位置で「動物の顔」が u。VII カード、「人間の顔」が正位置で -、逆位置が u、「動物の顔」が -、「牛の顔」が u。VIII カードで「人の顔」が o、「宇宙人の顔」「怪物・仮面ライダー・魔王の顔」が o、「動物の顔」が u。IX カードで「人間の顔」が正位置で o

, 逆位置で u, 「悪魔の顔・宇宙人の顔・えんまの顔」などが o 扱い。「動物の顔」が o, 「怪獣の顔」「リュウの顔と炎」が o。X カードで「顔と飾り」が o, 「怪物の顔と何か」「魔王の顔」「動物の顔」が o 扱い, Dds22 「王様の顔」「人の顔」が o, 「悪魔・魔王・魔法の顔」「鬼の顔」「顔のイラスト」等が o 扱い。

同じ Exner 法でも日本のデータは「顔反応」に対して寛容なスコアを付けている。この違いについて高橋ら (2002) は, Exner が「出現頻度だけでなく, インクプロットに輪郭線が存在するという基準を付加している」, 「多くの健全な被験者が答える反応であっても, 輪郭線のない領域を意味づけた反応は, 良好な形態水準でないなど, 理論的な判断を加えている」と指摘している。これに対して高橋らは出現頻度のみで評定をしている。II・III・X (W と Dds22) について, この理由から Exner は敢えて-にしているとのことであるが, 先述のようにその3枚のカードに限らず, Exner 自身の評定表では「顔反応」は一部の例外を除いて基本的に-扱いである。Exner のデータについても出現頻度について検討する必要がある。また Exner や高橋ら以外の研究者が「顔反応」に対してどのような観点からみていたのかについて詳細に今後検討する必要がある。

ともあれ, I カードの Ad, (Hd), (Ad), II カードの顔反応, III カードの Hd, IV カードの Ad, VIII カードの Hd, (Hd), IX カードの顔反応, X カードの顔反応などは, 高橋らの健全データでかなりの出現頻度だったということである。片口の「認知的距離」の概念は, 「反応が Inkblot の属性からどれほどかけ離れたものであるか, あるいは一致しているか」というものである。そしてこの距離が極端に増大せず喪失もせず, ほどほどの距離かどうかが問題となる。この「ほどほど」を, 実際的な歪曲の程度でみるか, それとも公共性の観点からみるか, つまり健全者の平均 (出現頻度の観点) からみるかで評価が分かれてくる。Inkblot の属性と反応との間の距離が増大する傾向にあったとしても, それが一般的・平均的傾向であれば, つまり公共性があれば, 「ほどほど」あるいは「適切」な認知的距離ということになる。この観点からすれば, 「顔反応」の出現は図版によっては, その図版特性からそもそも「認知的距離」の増大しやすい傾向があるため, 公共性のあることとなり, 被験者の問題を示唆する決め手にならないということになる。

3.2 体験的距離からの検討

体験的距離について, 片口 (1987) は V カードで「コウモリ」をみることを例に, この反応の Inkblot と反応の間の距離, すなわち認知的距離は適切であるとした上で, 以下のように述べている。

「しかし, 被験者 a は「これはコウモリに似ていますね」と言い, 被験者 b は「このコウモリが, 私にとびついてくる」と答えたとする。反応の基本概念は全く同じでも, 両者の体験的距離には明らかに大きな相違があり, この意味で被験者 a の反応は, 適度な体験的距離が保たれているのに対して, 被験者 b では, 体験的距離を全く失っていると言ってよからう。別言すれば, 被験者 b は, 被験者 a に比して, はるかに体験的距離の逸脱を示していると言える。」

「顔反応」の出現についても, 同様のことがいえるのではないか。検討してきたように「顔反応」という反応と Inkblot との距離, 認知的距離は (それが歪曲を通常期待されるよりも含むとしても) その出現頻度からすれば適切な範囲のうちと見做しうる。たとえば II カードや IX カードは反応しにくく, 色彩

の要因もあり反応しにくい、形態水準の下がりやすい図版でもある。ここで「顔反応」が出現することを重要なものと筆者は考えていたのであるが、出現頻度という観点からするとこのアプローチは間違っていたこととなる。しかし、その「顔反応」という基本概念が同じであっても、たとえば「これは鬼の顔にみえます」という場合と「この鬼が私を睨んでいて、襲いかかってきそうだ」という場合では、体験的距離に相違が出てくるのではないか。

筆者が検査を行った 20 代前半の被験者 A は、IVカードにおいて「クマ」と答え、その足の間に「牛の頭」がみえると答えた。この「クマ」も「牛の頭」も、それぞれの領域においてよく出現するものであり、それぞれ単独では問題のないものである。しかし、この両者を結合してしまい、一つの反応としてしまっていた。通常、クマの足の間から牛の頭がみえるということは期待されず、このような反応をする場合、その結合・関係性の奇妙さを踏まえて、ためらいなりエクスキューズなりが期待される場所であるが、A はいわゆる「真顔」であり、何ら葛藤を感じていないように見受けられた。こうした反応は逸脱言語反応の一つ、作話的結合の類であるが、そこに葛藤や遊びがないところが問題であった。

この同じ A は、IXカードに対して以下のように答えている。

- ①人間じゃなくて、なんか大きい、生物みたいので、グリーンとオレンジの生えているというか、巻いてあるようにみえて、ピンクは身体…肩…みたいにみえます。

I n q.

- ①ここんところが顔で、下の部分、出っ張った部分が人の肩、肩の部分で、人間？人間かよく判らない。オレンジ、耳で、グリーンはなんか吐き出しているみたい。白いものが吐いているように、口から吐いているようにみえて。この長いのが目にみえます。(大きい?) 頭が大きいから。身体はもっと大きいんじゃないかと思ったんですけど。

顔とその周辺という反応であり、この図版の傾向からすれば、注察念慮や対人恐怖などの症状をもつ患者において珍しくない反応とされている。A はこのIXカードを最も嫌いなカードとして選び、「なんかこう、色って言うより、怖い感じが。自分がみえる、口のところからドロっと出ている感じとか、あんまりよく判らない、説明しにくかった。このカードは好きじゃなかったです」と述べている。

出現頻度という観点からすれば、この A の反応も問題とされないかもしれないが、ここで見られる体験的距離が失われる感じ、距離のとれない、ある種の切迫感は見たての上で重要ではないだろうか。もちろん A の場合も、顔反応だけで見たてをしたわけではない。IVカードなど他の反応でも共通し一貫してみられた「遊びのなさ」や、その他の指標・観点から総合的に判断をしている。しかし、健常者においても顔反応はかなりの頻度で出現するのであろうが、その切迫感はいかかなものであろうか。片口の言うところの「ある種のゆとりと遊び」がそこにはないだろうか。

§ 4. おわりに

本稿の執筆に当たって、ある種の反省が筆者にはあった。筆者らは病理をもつ被験者・患者の検査を行い、それを詳細にみて所見を述べる仕事に従事している。自然、その病理が検査上、どのようなかたちに見われてくるかに注目するようになる。これは筆者のみの問題かもしれないが、そうした過程の中

で、少なくとも筆者には、病者ばかりをみて、健常な反応と病者のそれとの相違を吟味していく作業を怠るところがあった。「顔反応」にまつわるエピソードは、筆者のそうした片手落ちの姿勢について反省させられるものであった。今回は片口の「距離概念」を軸に（何ら片口の主張の域を出ていないかもしれないが）検討を行った。今後さらにデータを集めてこの問題について検討をしていきたい。

参考文献

- 1) 馬場禮子, 吉田直子ほか: 反応過程における距離の意味, 『ロールシャッハ研究』, XXII: 1 - 18
1980
- 2) Exner, J.E.: "The Rorschach: A Comprehensive system. Volume 1", Wiley 1974
- 3) Exner, J.E.: "Rorschach Form Quality Pocket Guide Second Edition" Rorschach Workshops
1995
- 4) Exner, J.E.: "The Rorschach: A Comprehensive system. Volume 1 (4th. Ed)", Wiley 2002
- 5) 片口安史: 『心理診断法』, 牧書店 1956
- 6) 片口安史: 『心理診断法詳説』, 牧書店 1960
- 7) 片口安史: 『新・心理診断法』, 金子書房 1974
- 8) 片口安史: 『改訂 新・心理診断法』, 金子書房 1987
- 9) Rapaport, D., Gill, M.M., Schafer, R.: "Diagnostic Psychological Testing II" Chicago: The Year
Book Publishers, Inc. 1946
- 10) Rorschach, H.: "Psychodiagnostic." 片口訳 (1976 改訳) 『精神診断学』, 金子書房 1921
- 11) 酒木保: ロールシャッハ法における心理的距離に関する論考—形と主体の視点から, 『京都文教大
学臨床心理研究』, 創刊号: 37 - 49 1999
- 12) 空井健三: Deviant Verbalization について—距離による考察, 『ロールシャッハ研究』, XI: 231
- 242 1969
- 13) 高橋雅春・高橋依子ほか: 『ロールシャッハ形態水準表—包括システムのわが国への適用』, 金剛出
版 2002
- 14) 田澤安弘: 心的距離の観点から見た精神分裂病—ロールシャッハ・テストを媒体として, 『臨床精
神病理』, 16(3), 287 - 303 1995